

熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象

有元光彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs
in the Western Mainland Dialects of Kumamoto Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 25, 2009)

0. はじめに¹

本稿の目的は、熊本県本土西部方言を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは、有元光彦(2007a, 2007b, 2007c)等と言うところの「テ形(音韻)現象」である。有元光彦(2007c)によると、テ形現象は次のように定義されている。

(1) テ形(音韻)現象:

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類(語幹末分節音の違い)によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言Δにおいて、〈書いてきた〉を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、〈取ってきた〉は*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、方言Δはテ形現象を持つと言う。²

本稿では、熊本県本土西部方言にも周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのタイプを示すか、さらにこのタイプが周辺地域のテ形現象のタイプとどのような関連性があるか、について分析する。

1. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組み

1 本稿の一部は、平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(研究代表者:有元光彦・No.16520281)、及び平成19~21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(研究代表者:有元光彦・No.19652041)によるものである。フィールドワークにおいては、熊本県八代市・宇土市・宇城市三角町・葦北郡芦北町の各教育委員会及びインフォーマントの方々大変お世話になった。記して感謝する次第である。

2 共通語においても、動詞の種類によって、当該部分に「テ」が現れるか「デ」が現れるかの違いがあるので、共通語もテ形現象を持っていることになる。従って、テ形現象はすべての方言に存在することになるが、そうであるからと言って、テ形現象の存在意義がなくなるわけではない。

では、基底形 (underlying form) に音韻ルール (phonological rule) が線的 (linear) に適用されることによって、音声形 (phonetic form) が派生される。³ 基底形は、心内辞書 (mental lexicon) に登録されている辞書項目 (lexical item) が形態的操作によって組み合わせられたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成 (基底形) は、「動词语幹+テ形接辞」となっている。

動词语幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞:

/kaw/ <買う>, /tob/ <飛ぶ>, /jom/ <読む>, /kas/ <貸す>, /kak/ <書く>, /kog/ <漕ぐ>, /tor/ <取る>, /kat/ <勝つ>, /sin/ <死ぬ> など

b. 母音語幹動詞:

/mi/ <見る>, /oki/ <起きる>, /de/ <出る>, /uke/ <受ける> など

c. 不規則語幹動詞:

/i/ ~ /it/ ~ /itate/ <行く>⁴, /ki/ <来る>, /s/ <する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて /te/ である。テ形接辞の直後には、様々な単語が続く。例えば、[kita] <(～て)きた>, [minasse] <(～て)みなさい>, [kure] <(～て)くれ> 等である。

2. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成20 (2008) 年3月にフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、熊本県^{やつしろ}八代市^{うと}、宇土市^{うき}、宇城市^{みすみ}三角町^{あしきた}、葦北郡^{あしきた}芦北町である。

秋山正次 (1983) によると、熊本県方言は「熊本北部方言」と「熊本南部方言」に大きく分類される。前者はさらに2つに下位区分され、阿蘇郡 (現阿蘇市近辺)・上益城郡の東部方言 (熊本東部方言) とそれ以外の地域 (熊本北部方言) に分類されている。また、後者は、より詳細な観点から言えば、球磨^{くま}方言、天草方言、及び八代・葦北方言の3つに下位区分されている。この方言区画に従えば、本稿で扱う4地域^{あそ}の方言は、八代市及び葦北郡芦北町の方言が「熊本南部方言」に、宇土市及び宇城市三角町の方言が「熊本北部方言」に分類されている。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?は少し不自然であることを、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。また、記号&はインフォーマントが聞いたことがあると回答していることを表す。

また、本稿では語幹末分節音 (stem-final segment) が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が /k/ である動詞、/kak/ <書く> は「k 語幹動詞」と呼ぶ。「i₁,

3 以下、基底形は記号//で、音声形は記号[]でそれぞれ括る。

4 /itate/ は、語幹末分節音が /e/ で終わるので、下一段動詞 (e 語幹動詞) であるが、便宜上ここに並べておく。

e₁ 語幹動詞」は、語幹が1音節である i, e 語幹動詞を、「i₂, e₂ 語幹動詞」は、語幹が2音節以上の i, e 語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

3. 分析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形現象のタイプを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。表の左端列に挙げていない語幹が使われる場合には、その都度注で説明する。

3. 1. 八代市方言

本節では、八代市方言のテ形現象を観察する。動詞テ形のデータを【表1】に挙げる。

【表1】 八代市方言の動詞テ形

語幹	テ形	意味
kaw <買う>	kokkita	買って来た
tob <飛ぶ>	tokkita	飛んできた
jom <読む>	jokkita *jonkita	読んできた
kas <貸す>	kjakkita	貸して来た
okos <起こす>	okekkita	起こして来た
kak <書く>	kjakkita	書いて来た
kog <漕ぐ>	kekkita kokkita ⁵	漕いできた
ojog <泳ぐ>	oekkita ojokkita ⁶	泳いできた
tor <取る>	tottekita tokkita	取って来た
kat <勝つ>	katttekita *kakkita	勝って来た
sin <死ぬ>	ʃindekure *ʃinkure	死んでくれ
mi <見る>	mittekita *mittekita mikkita ⁷	見て来た

5 女性のインフォーマントからのみ聞かれた。

6 女性のインフォーマントの第1回答であるが、男性のインフォーマントは使用しないとのことである。

7 女性のインフォーマントからのみ聞かれた。

oki <起きる>	okitekita *okittekita *okikkita	起きてきた
de <出る>	dekkita	出てきた
uke <受ける>	ukekkita	受けてきた
sute <捨てる>	sutekkita	捨ててきた
itate <行く>	itakkita	行ってきた
ki <来る>	kitemiro kiteminasse	来てみる 来てみなさい
s <する>	ʃitekita ? ʃikkita *sekkita	してきた

【表1】において分かることは、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には促音、または [te], [de] が現れていることである。[te], [de] が現れる環境は次の通りである。

- (3) a. [te] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, i/ のときである。
b. [de] が現れるのは、語幹末分節音が /n/ のときである。

(3)のうち、i 語幹動詞に関しては、【表2】に示したように、r 語幹化が進行しているようである。

【表2】 i, e 語幹動詞の否定形・過去形

	否定形	過去形
mi <見る>	min %miran <見ない>	mita *mitta <見た>
oki <起きる>	okin %okiran <起きない>	okita *okitta <起きた>
de <出る>	%den deran <出ない>	deta *detta <出た>
uke <受ける>	uken *ukeran <受けない>	uketa *uketta <受けた>

即ち、i 語幹動詞はすでに /mir/ <見る>, /okir/ <起きる> というように r 語幹動詞として振る舞っているが、e 語幹動詞は /de/ <出る>, /uke/ <受ける> というように e 語幹動詞のままである。

従って、(3a) 中の /i/ は /r/ に置き換えられるので、(3)は次のようにまとめられる。

(4) [te], [de] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, n/ のときである。

以上より、八代市方言は、有元光彦 (2007a) で言うところの「真性テ形現象方言 (タイプ TB 方言)」である。ただし、r, i, 語幹動詞においては、女性のインフォーマントが適格であると判断していることから、“非テ形現象化” が進行しつつあるのかもしれない。非テ形現象化とは、真性テ形現象が崩壊する現象である (cf. 有元光彦 (2007a: 218-222))。

生成音韻論では、/r, t, n/ は [-syl, +cor, -cont] という弁別素性 (distinctive feature) の集合で表すことができる。⁸ 従って、有元光彦 (2007a, 2007b, 2007c, 2007d) の枠組みに沿うと、八代市方言には次のようなルールが存在することになる。⁹

(5) e 消去ルール:

$$e \rightarrow \phi / [-syl, +cor, -cont]^c \text{ t } ___]$$

例えば、[ukekkita] <受けてきた> は、(5)の適用を受けて、次のような派生過程を辿る。¹⁰

(6)	[[[uke] te] [[ki] ta]]	基底形
	[[[uke] t] [[ki] ta]]	e 消去ルール
	[[[uke] k] [[ki] ta]]	逆行同化ルール ¹¹
	[ukekkita]	音声形

(6)においては、まず基底形に e 消去ルールが適用されて、/te/ の /e/ が消去される。これによって、残った /t/ に逆行同化ルールが適用され、直後の /k/ に同化する。最終的に、[ukekkita] <受けてきた> という適格な形が出力されることになる。

以後の節ではルール・派生に関する詳細は省略するが、理論的な問題については有元光彦 (2007a) を参照されたい。

3. 2. 宇土市方言

本節では、宇土市方言 (網津・網田) のテ形現象について記述する。動詞テ形のデータを【表 3】に挙げる。

8 本稿で使用する弁別素性は、[syl (labic)] (主音節性)、[cor (onal)] (舌頂性)、[cont (inuant)] (継続音性) である。

9 記号^cは補集合 (complement) を表す。

10 (5), (6)で使用している角括弧 (bracket) は語彙音韻論 (Lexical Phonology) で利用されるツールである。語彙音韻論では、派生のどの段階で角括弧消去 (bracket erasure) が行われるかが問題であるが、ここでは、その問題に触れず、便宜的に派生の最終段階まで角括弧を残した表示としている (cf. Mohanan (1986: 21-25))。

11 このルールに関しては、有元光彦 (2007a: 41-42) を参照されたい。

【表3】宇土市方言の動詞テ形

語幹	網津	網田	意味
kaw <買う>	ko:tʃikita *kokkita	ko:tʃikita *kokkita	買ってきた
tob <飛ぶ>	to:ɕikita	to:ɕikita	飛んできた
jom <読む>	jo:ɕikita	jo:ɕikita	読んできた
kas <貸す>	kja:tʃikita	kja:tʃikita	貸してきた
kak <書く>	kja:tʃikita	kja:tʃikita	書いてきた
kog <漕ぐ>	ke:ɕikita	%ko:ɕikita ke:ɕikita	漕いできた
oeg <泳ぐ>	oe:ɕikita	oe:ɕikita	泳いできた
tor <取る>	tottekita *tottʃikita	to:tʃikita ottottekita ¹²	取ってきた
kar <借りる>	—	katekita *ka:tʃikita	借りてきた
kat <勝つ>	katekita	katekita	勝ってきた
sin <死ぬ>	ʃindejoka ¹³	ʃindekure	死んでくれ
mi <見る>	%mittekita mitʃikita	mitʃikita	見てきた
oki <起きる>	okittekita *okitʃikita	okittekita *okitʃikita	起きてきた
de <出る>	detekita %detʃikita	detʃikita	出てきた
uke <受ける>	uketʃikita	uketʃikita	受けてきた
i ~ itate <行く>	%itekita itakkita	itekita ?itʃikita ita(:)tʃikita	行ってきた
ki <来る>	kitemiraŋkana ¹⁴ *kitʃimiraŋkana	kitekureŋka ?kitʃikure	来てくれないか
s <する>	ʃitekita *ʃitʃikita *setekita	ʃitekita *ʃitʃikita	してきた

12 意味は<盗んできた>であるが、この場合は「テ」に相当する部分に [te] しか現れない。

13 意味は<死んでよい>である。

14 意味は<来てみないかな>である。

【表2】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声は、大部分 [tʃi], [dʒi] である。これらの音声が現れない場合には、[te], [de] が現れているが、その分布は次の通りである。

- (7) a. [te] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, i/ のときである。
b. [de] が現れるのは、語幹末分節音が /n/ のときである。

ただし、 i_1 語幹動詞である〈見る〉の場合には、[tʃi] が現れる形も適格であることから、(7)のリストには / i_2 / だけを入れておく方がよいかもしい。

ここで、 i, e 語幹動詞の r 語幹化の状況を見てみる。以下の【表4】を見られたい。

【表4】 i, e 語幹動詞の否定形・過去形

	否定形		過去形	
	網津	網田	網津	網田
mi <見る>	min %miran <見ない>	min %miran <見ない>	mita *mitta <見た>	mita *mitta <見た>
oki <起きる>	okin %okiran <起きない>	okin okiran <起きない>	okitta <起きた>	okita okitta <起きた>
de <出る>	%den deran <出ない>	den deran <出ない>	deta *detta <出た>	deta *detta <出た>
uke <受ける>	uken *ukeran <受けない>	uken *ukeran <受けない>	uketa *uketta <受けた>	uketa *uketta <受けた>

【表4】から、いずれの地域においても、おおむね i 語幹動詞は r 語幹化しており、 e 語幹動詞は r 語幹化していないことが分かる。

従って、(7)は次のように集約できる。

- (8) [te], [de] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, n/ のときである。

以上より、宇土市（網津・網田）は、有元光彦（2007a）で言うところの「擬似テ形現象方言（タイプPA方言）」であると考えられる。ただ、気になることは、 r, i_1 語幹動詞において [tʃi] の現れる形が適格であるという点である。¹⁵ これは、 r, i_1 語幹動詞において“非テ形現象化”が進行していることの表れであると考えられるが、さらに興味深いことは、これが起こる動詞

15 ただし、*[ka:tʃikita] <借りてきた>は不適格である。

の種類が八代市方言と同じであるという点である。しかし、どの種類の動詞から非テ形現象化が起こるかという問題については、現時点では明確になっていない。今後の課題である。¹⁶

3. 3. 宇城市三角町方言

本節では、三角町方言（波多・中村）のテ形現象を記述する。動詞テ形のデータを【表5】に挙げる。

【表5】 三角町方言の動詞テ形

語幹	波多	中村	意味
kaw <買う>	ko:tekita ko:tʃikita	ko:tekita ko:tʃikita	買ってきた
tob <飛ぶ>	tondekita to:dekita to:ɕikita	to:tʃikita to:ɕiitta ¹⁷	飛んできた
jom <読む>	jo:ɕikita	jondekita jo:tʃikita	読んできた
kas <貸す>	%kafitekita kja:tʃikita	kja:tʃikita	貸してきた
kak <書く>	kaitekita kja:tekita kja:tʃikita	kaitekita kja:tʃikita	書いてきた
kog <漕ぐ>	ke:dekita ?ke:ɕikita	koidekita &kjo:tʃikita ke:tʃikita	漕いできた
oeg <泳ぐ>	ojoidekita ojo:dekita oe:dekita *ojo:ɕikita	—	泳いできた
tor <取る>	tottekita	tottekita ottottekita	取ってきた
kat <勝つ>	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin <死ぬ>	uttfindekure ¹⁸	findekure	死んでくれ
mi <見る>	mittekita *mitʃikita	mittekita *mittekita *mitʃikita	見てきた

16 有元光彦（2007b：43-47）では、生物学的な類推を利用して、非テ形現象化を「感染」と考え、それを下位分類している。そのような方法論がテ形現象の説明に有効かどうか明確にはなっていないが、何らかの示唆を与えるものと考えている。

17 意味は<飛んで行った>である。

18 [gonetekure] <死んでくれ>という形も見られた。

oki <起きる>	okitekita okittekita *okitjikita	okitekita %okittekita *okitjikita	起きてきた
de <出る>	detjikita	detekita *dettekita de(:)tjikita	出てきた
uke <受ける>	uketekita uketjikita	uketjikita	受けてきた
i ~ it ~ itate <行く>	ittekita %itekita itakkita ¹⁹	ittekita *itekita *itakkita *itatjikita	行ってきた
ki <来る>	kitemiraŋka *kitjimiraŋka	kitekurenna *kitjikurenna	来てくれないか
s <する>	jitekita *jitjikita	jitekita *jitjikita	してきた

【表5】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には、[te], [de]、及び [tʃi], [dʒi] が現れている。[te], [de] が現れる環境は以下の通りである。

- (9) a. [te] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, i/ のときである。
 b. [de] が現れるのは、語幹末分節音が /n/ のときである。

次に、i, e 語幹動詞の語幹末分節音がどうなっているかを分析するために、否定形・過去形を観察してみる。次の表に挙げる。

【表6】 i, e 語幹動詞の否定形・過去形

	否定形		過去形	
	波多	中村	波多	中村
mi <見る>	*min miran <見ない>	?min miran <見ない>	mita *mitta <見た>	mita *mitta <見た>
oki <起きる>	okin okiran <起きない>	okin okiran <起きない>	okita okitta <起きた>	okita %okitta <起きた>

19 インフォーマントによると、古い言い方とのことである。

de <出る>	den deran <出ない>	den deran <出ない>	deta *detta <出た>	deta *detta <出た>
uke <受ける>	uken *ukeran <受けない>	uken *ukeran <受けない>	uketa *uketta <受けた>	uketa *uketta <受けた>

【表6】から分かるように、いずれの地域においても、<見る><起きる>の語幹は /mi/, /oki/ ではなく、/mir/, /okir/ のようになっているようである。<出る><受ける>の語幹は /de/, /uke/ である。

従って、(9)は次のように集約できる。

(10) [te], [de] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, n/ のときである。

以上より、三角町方言は「擬似テ形現象方言 (タイプ PA 方言)」であると考えられる。ただし、波多地域においては、g 語幹動詞で [de] が現れやすくなっている。これは非テ形現象化の兆しであると考えられる。

3. 4. 葦北郡芦北町方言

本節では、芦北町方言^{はかりいし おおいわ} (計石・大岩) のテ形現象について記述する。地理的には、計石は芦北町西南部で海岸部、大岩は東北部で山間部の地域である。【表7】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表7】 芦北町方言の動詞テ形

語幹	計石	大岩	意味
kaw <買う>	ko(:)tekita *ko:tjikita *kokkita	kokkita	買って来た
tob <飛ぶ>	tondekita todekita *toɕjikita	tondekita tokkita	飛んできた
asob <遊ぶ>	-----	asukkita	遊んできた
jom <読む>	jondekita jodekita	jondekita *jokkita *jonkita	読んできた
ogam <拝む>	-----	ogandekita ogokkita	拝んできた

kas <貸す>	kafitekita *kja:tekita	kjakkita	貸してきた
kak <書く>	kaitekita *kja:tekita	kjakkita	書いてきた
kog <漕ぐ>	koidekita *ke:dekita	kekkitā	漕いできた
oeg <泳ぐ>	—	ojokkita oekkita	泳いできた
tor <取る>	tottekure	tottekita	取ってきた
kat <勝つ>	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin <死ぬ>	ʃindekure	ʃindejokarote ²⁰	死んでくれ
mi <見る>	mittekita *mittekita *mikkita	mittekita *mikkita *mitʃikita	見てきた
oki <起きる>	okitekita okittekita *okikkita	okitekita okittekita *okikkita	起きてきた
de <出る>	detekita dekkita	detekita dekkita ²¹	出てきた
uke <受ける>	uketekita ukekkita	uketekita ukekkita	受けてきた
i ~ it ~ itate <行く>	ittekita itekita itakkita	ittekita itakkita	行ってきた
ki <来る>	kitemiŋkai	kitemiŋkana	来てみないか
s <する>	ʃitekita *setekita	ʃitekita *setekita	してきた

【表7】から分かるように、同じ芦北町であるにもかかわらず、大きな違いが見られる。まず、計石地域では、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に [te], [de] 及び促音が現れているが、促音の分布に特徴が見られ、次のようになっている。

(II) 促音が現れるのは、語幹末分節音が /e/ のときである。

一方、大岩地域では、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に促音、及び [te], [de] が現

20 意味は<死んでいいだろうよ>である。

21 インフォーマントによると、古い形だとのことである。

れており、後者については次のような分布を成している。

- (12) a. [te] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, i/ のときである。
 b. [de] が現れるのは、語幹末分節音が /n/ のときである。

ここで、i, e 語幹動詞の語幹末分節音を観察するために、これらの否定形・過去形を見つめる。次のようになっている。

【表8】 i, e 語幹動詞の否定形・過去形

	否定形		過去形	
	計石	大岩	計石	大岩
mi <見る>	min ²² miran mijan <見ない>	min miran <見ない>	mita *mitta <見た>	mita *mitta <見た>
oki <起きる>	?okin okiran okijan <起きない>	okin okiran <起きない>	okita okitta <起きた>	okita okitta <起きた>
de <出る>	den deran *dejan <出ない>	den deran <出ない>	deta *detta <出た>	deta *detta <出た>
uke <受ける>	uken *ukeran *ukejan <受けない>	uken *ukeran <受けない>	uketa *uketta <受けた>	uketa *uketta <受けた>

【表8】から分かるように、いずれの地域においても、<見る><起きる>の語幹は /mir/, /okir/ のように r 語幹化している傾向があるが、<出る><受ける>の語幹は /de/, /uke/ のように r 語幹化していないようである。このような一段活用動詞の五段化は、計石方言の [jan] が付く系列でより顕著に観察される。²³ 即ち、i 語幹動詞では [mijan], [okijan] が適格であり、e 語幹動詞では *[dejan], *[ukejan] が不適格であることから、i 語幹動詞は「j 語幹化」しており、e 語幹動詞はしていないと言えよう。従って、<見る><起きる>の語幹は /mij/, /okij/ となっていると考えられる。

つまり、(12)は次のように集約できる。

22 インフォーマントによると、古い形だとのことである。

23 この系列は、鹿児島県上甕島瀬上方言などでも見られる (cf. 有元光彦 (2007a: 158))。

(13) [te], [de] が現れるのは、語幹末分節音が /r, t, n/ のときである。

以上より、計石方言は「真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）」、大岩方言は「真性テ形現象方言（タイプ TB 方言）」であると考えられる。ただし、大岩方言の*[jokkita] <読んできた> が不適格であることから、m 語幹動詞には有元光彦（2007a: 37）で言うところの「音節数条件」が関与していると考えられる。

4. 比較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形現象を比較する。まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表9】にまとめる。ここでは、記号 Q はいわゆる促音を表す。記号 / は、その両端にある音声が現れる、即ちインフォーマントによって揺れがあることを表す。記号—は、/i/ ~ /it/ <行く> という語幹が存在しないことを表す。記号^sは、「音節数条件」が関与していることを表す。

【表9】 共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較

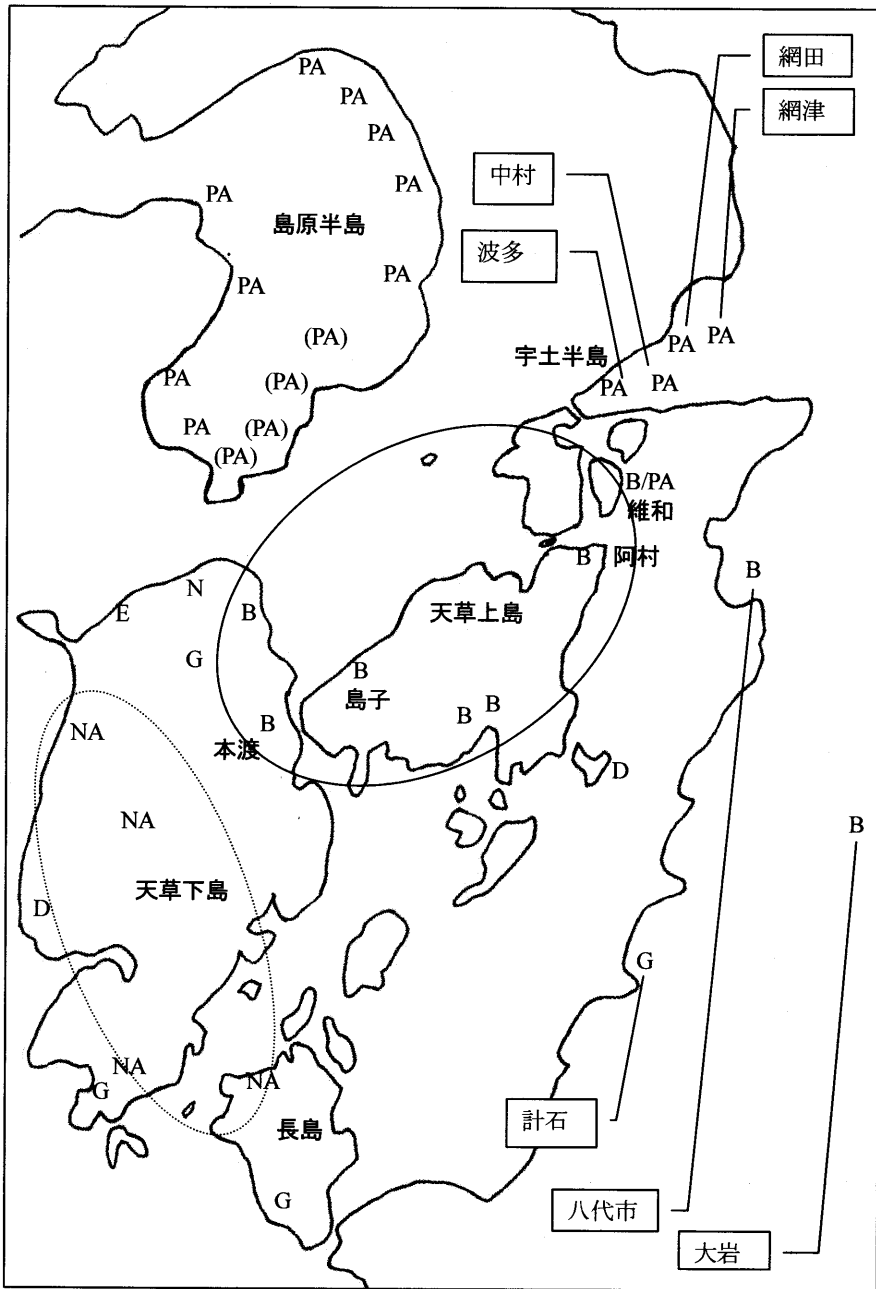
語幹	八代市方言	宇土市方言	三角町方言	芦北町方言	
				計石	大岩
kaw <買う>	Q	tʃi	tʃi	te	Q
tob <飛ぶ>	Q	ɕʃi	ɕʃi/tʃi	de	Q
jom <読む>	Q	ɕʃi	ɕʃi/tʃi	de	Q ^s
kas <貸す>	Q	tʃi	tʃi	te	Q
kak <書く>	Q	tʃi	tʃi	te	Q
kog <漕ぐ>	Q	ɕʃi	de(~ɕʃi)/tʃi	de	Q
tor <取る>	te/Q	te/tʃi	te	te	te
kat <勝つ>	te	te	te	te	te
sin <死ぬ>	de	de	de	de	de
mi <見る>	te/Q	te/tʃi	te	te	te
oki <起きる>	te	te	te	te	te
de <出る>	Q	tʃi	tʃi	Q	Q
uke <受ける>	Q	tʃi	tʃi	Q	Q
i ~ it <行く>	—	te	te	te	te
ki <来る>	te	te	te	te	te
s <する>	te	te	te	te	te

第3節、及び【表9】でまとめたように、八代市方言及び芦北町（大岩）方言は真性テ形現象方言（タイプ TB 方言）である。宇土市方言及び三角町方言は擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）である。芦北町（計石）方言は、真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）である。

5. 地理的考察

本節では、地理的な問題について議論する。

本稿で取り上げた諸方言のテ形現象タイプの地理的分布を示すと、【図1】のようになる。【図1】は、有元光彦（2008b：369）に本稿での分析結果を加えたものである。記号Nは非テ形現象方言、記号B, D, E, Gは真性テ形現象方言のタイプTB, TD, TE, TG方言、記号PAは擬似テ形現象方言（タイプPA方言）をそれぞれ表す。

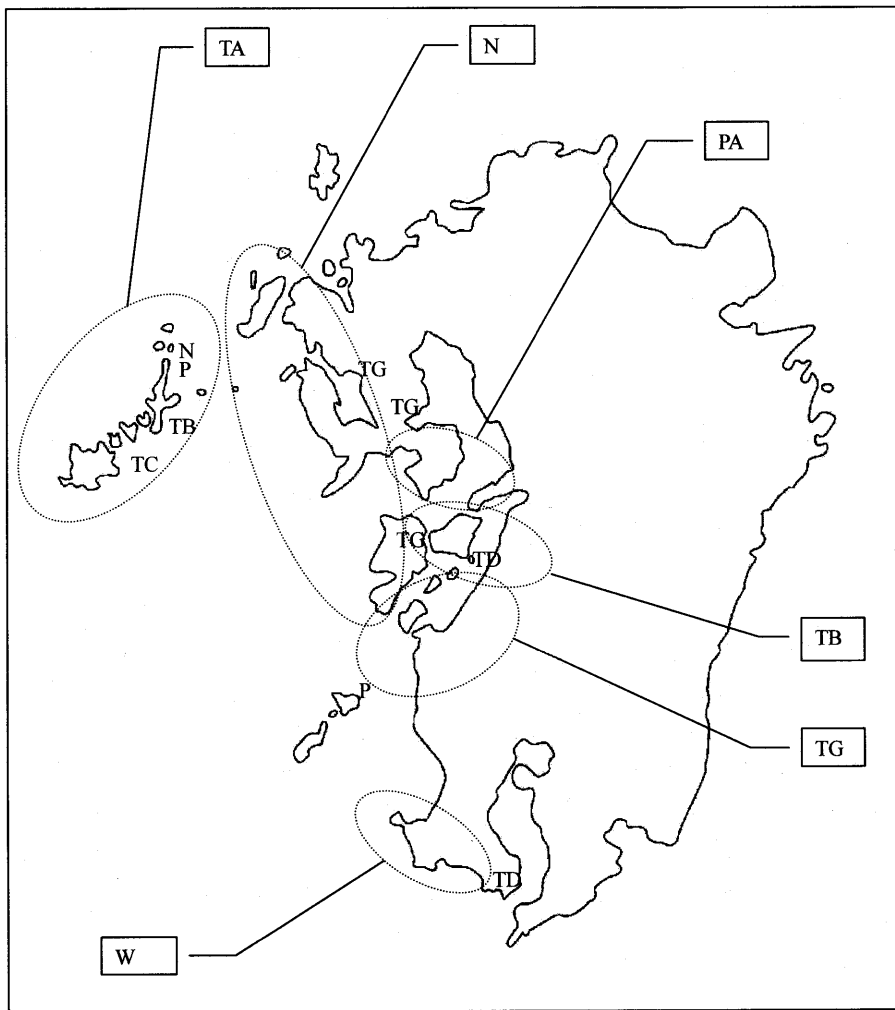


【図1】天草・島原地域の地理的分布

【図1】から分かるように、まず宇土半島はタイプPA方言であり、長崎県の島原半島と同じ擬似テ形現象方言である。次に、八代市及び芦北町大岩地域はタイプTB方言であり、天草上島を中心とした天草北部地域と同じ真性テ形現象方言である。

天草北部の維和方言は、有元光彦（2007a：205-207）にも示したように、タイプTB方言とタイプPA方言との“共生”タイプであるが、【図1】からも分かるように、タイプTB方言は天草上島から、タイプPA方言は宇土半島から来たものである。従って、有元光彦（2007a：207）には「西（天草方言圏）にある真性テ形現象と東（熊本市方言圏）にある非テ形現象に挟まれ、擬似テ形現象が発生し、その擬似テ形現象と真性テ形現象が重なる部分に維和方言が位置していると考えられる。」とあるが、この箇所についてはより詳細な記述を要する。

次に、全体像をより明らかにするために、九州西部全体の概観図を【図2】に示す。【図2】は、有元光彦（2007a, 2008a, 2008b, 2009）に本稿での分析結果を加えたものである。²⁴



【図2】 九州西部方言のテ形現象の地理的分布

24 【図2】には、見やすくするために、若干の修正を施している。

【図2】から分かるように、当該地域近辺では大きく3つの方言圏が形成されている。まず、第1の方言圏は、島原半島から宇土半島に跨る範囲に分布している擬似テ形現象方言（タイプPA方言）である。このタイプは海を跨ぐ形で分布しており、まさに“海の道”の存在を示す証拠となるであろう。また、このタイプはかなり広く分布していると考えられ、藤本憲信（2002）で記述してある熊本県菊池方言（熊本市の東北部）にも見られる。

次に第2の方言圏は、天草北部から八代海（不知火海）を跨いでその対岸の八代市まで分布している真性テ形現象方言（タイプTB方言）である。この分布も海を跨いでいる。前述のタイプPA方言の場合も同様であるが、島原湾や八代海には古くから船による海上の交流があることも、この分布形成の要因となっているものと考えられる。

そして第3の方言圏は、天草南部から鹿児島県長島を経て芦北町近辺に至る範囲に分布している真性テ形現象方言（タイプTG方言）である。この分布は、現時点ではこれらの範囲に集中しているが、歴史的には【図2】のNの範囲までも覆っていた可能性も否めない。²⁵ なぜなら、有元光彦（2008a, 2009）で示したように、N方言圏の東側にタイプTG方言が隣接して点在しているからである。歴史的に古くはタイプTG方言が存在していたが、言語内の要因によって非テ形現象化して、N方言圏が作られたのか、それともタイプTG方言が存在していた地域に、言語外の要因によってタイプN方言が侵入してきたのか、現時点では推測の域を出ない。ただ、後者であるとしたら、キリスト教の布教の問題が大きく関連しているのではないかと考えられる。

以上、長崎県島原半島から天草諸島に至るまでの地域、及びそれらの本土側の地域の分布を観察すると、有元光彦（2007a）の記述の時点よりは、その分布の様相がかなり明らかになったのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、熊本県本土西部方言を対象とし、次の2点に関して議論してきた。

- (4) a. 熊本県本土西部方言のテ形現象の記述
- b. 地理的考察

(14a) においては、八代市・芦北町（大岩）方言が真性テ形現象方言（タイプTB方言）、宇土市・三角町方言が擬似テ形現象方言（タイプPA方言）、そして芦北町（計石）方言が真性テ形現象方言（タイプTG方言）であることがそれぞれ判明した。

(14b) においては、(14a) の記述を踏まえて、3つの方言圏がより顕著に浮き彫りにされた。即ち、3つの方言圏とは、島原半島から宇土半島に跨るタイプPA方言圏、天草上島から対岸の八代市に跨るタイプTB方言圏、そして天草下島南端から鹿児島県長島を経て対岸の芦北町に至るタイプTG方言圏である。これらの方言圏は、今後の調査によって、その範囲がさらに拡大する可能性がある。

25 もちろん、【図2】において、非テ形現象方言（N）の領域は当該の点線の範囲だけではない。【図2】では九州西部だけが対象となっているため、そのような括り方になっているだけである。実際、何も表記していない地域の大部分は非テ形現象方言である可能性が高い。ただし、点線で括った非テ形現象方言と、何も表記していない地域に現れる非テ形現象方言とが、同じものであるかどうかは吟味する必要がある。今後の課題である。

理論的な面においても、いくつかの問題が生じている。まず、今回記述した八代市・宇土市方言において、r, i₁ 語幹動詞から非テ形現象化が生じているという点である。非テ形現象化がどの種類の動詞から起こるのかという問題は、テ形現象の本質の解明にとって決して避けて通ることはできないであろう。また、タイプN方言圏の位置付けについても理論的な解明が待たれるだろう。タイプN方言は、単にタイプTG方言が非テ形現象化した末の姿なのか、それとも言語外の影響によって生じたものなのか、今後の課題である。さらに、天草下島に現れる様々なタイプの方言、つまり“多様性”についても理論的なアプローチが必要であろう。有元光彦(2007a: 221)では、天草地域に多様な方言タイプが観察されたため、「天草地域は、西ルートと東ルートそれぞれにおける言語変化が行き着く“収束(収斂)点”である。」と記述している。即ち、収束点では様々な形の非テ形現象化という言語変化が進行している、と考えている。しかし、有元光彦(2007a)以後の調査によって、大きく3つの方言圏の存在が明らかにされたことから、理論的にも有元光彦(2007a)の考え方を再度見直す段階に来ているのではないかと考える。ただ、言うまでもなく、天草諸島に多様な方言タイプが存在することは、確かな事実である。

今後の詳細な調査によって、記述の精度を高めるとともに、理論的なアプローチも進める必要があるだろう。

【参照参考文献】

- 秋山正次(1983)「熊本県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』飯豊毅一ほか編 国書刊行会
- 有元光彦(2005)「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』2005年9月号 明治書院 pp.74-82.
- (2006)「長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』第56巻 第1部 pp.47-61.
- (2007a)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房
- (2007b)『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281・研究代表者:有元光彦)研究成果報告書
- (2007c)「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」九州方言研究会・第24回研究発表会(2007年7月7日)発表ハンドアウト
- (2007d)「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会・第20回大会発表論文集』社会言語科学会編 pp.190-193.
- (2008a)「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』第57巻 第1部 pp.1-13.
- (2008b)「再訪:熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(語学教育フォーラム 第16号) 大東文化大学語学教育研究所 pp.357-374.
- (2009)「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山

口大学教育学部)』第58巻 第1部 pp.15-31.

Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

藤本憲信 (2002) 『熊本県菊池方言の文法』 熊本日日新聞情報文化センター

Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.

小林隆ほか (2008) 『シリーズ方言学1 方言の形成』 岩波書店

九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房

Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*, D. Reidel Publishing Company.